

Latvija

Dievs, svētī Latviju,
Lat-viju,
Dolce
Lat-vija

日本ラトビア音楽協会ニュース 第14号
(2008年12月5日発行)

日本ラトビア音楽協会事務局
〒229-0014 神奈川県相模原市若松1-14-10 遠藤税理士事務所内
Tel 042-745-3334 Fax 042-740-4725
E-mail 0424668801@jcom.home.ne.jp

発行代表者 加藤晴生
〒277-0823 千葉県柏市布施新町2-18-9 Fax 04-7132-5423
E-mail katohr@earth.ocn.ne.jp

編集代表者 徳田浩
〒169-0051 東京都新宿区西早稲田3-31-6-504 柔道新聞編集室
Tel・Fax 03-3203-0363
E-mail htoku@pastel.ocn.ne.jp

5周年記念イベントへ期待高まる 当協会創立4周年記念レセプション

9月15日 アークヒルズクラブ

当協会創立4周年記念のレセプションが、赤坂のアーカスビル37階にあるお洒落なクラブ「アークヒルズクラブ」で開かれ90名が参集する盛会だった。

冒頭、加藤専務理事が、直前に開かれた理事会の議事報告を行い、藤井会長の開会挨拶、ヴァイヴァルス大使の挨拶のあと、岡村副会長の乾杯の音頭で祝賀会に入った(司会・関口教和運営委員)。(因みに乾杯用のシャンパンやワインそれにバルザムはラトビア大使館からの寄贈。)

乾杯の後さっそく今回の目玉の一つ、新会員の八千代松陰高校の山本慎一先生率いる同校混声合唱部(75名)の選抜メンバー14名によるラトビアの歌3曲の清新なハーモニーの見事な合唱が披露され、一気に雰囲気盛り上がった。この日は矢田ちひろさんのピアノ演奏、小田陽子さん、西脇久夫さんの歌が続く。(進行・中嶋勝彦運営委員)

パーティー半ばに、NHK東京児童合唱団の加藤洋朗指揮者から、8月5日から19日までハンガリー、オーストリア、スロバキア、ラトビア(リーガに4日間)を回った演奏旅行の報告があった。

「一行69名。リーガでは3回の公演を行い、アイラさん、カッタイ先生には大変お世話になった。リーガの大



八千代松陰高校合唱部が演奏するラトビアの歌(上)を、感動の表情で聴く大使ら出席者(下)



聖堂で歌ったときなどN児の生意気盛りの中学生の団員達も感激でウルウルしながらのステージになった」。(詳細は6面に金田典子指揮者の報告を掲載)

会場には7月12日にリーガで行われた『歌と踊りの祭典』野外大ステージのDVD映像が流され、その壮大さに目を奪われる会員も。

またこの日初めて参加した堀俊輔さん(東京交響楽団指揮者)、朝日新聞元欧州総局長の宮崎勝治さんらからもお祝いの挨拶があった。

午後2時、レセプションは来年2009年の協会5周年記念イベントへの期待を抱かせつつ閉会となった。

理事会開催

レセプションに先立ち11時から本年度中間点での理事会が開かれ、加藤専務理事により議事が進められた。以下その内容。

- ①板垣忠直会員を顧問にする件、承認。
- ②今年度の主な行事・活動

- 1、4月、東京カンタートの合唱講習会へ山脇卓也氏参加。
- 2、6月25日、清水光子会員の紹介により、佐藤満喜子さん所有のピアノが大使館に寄贈された(Latvija13号で紹介済み)。
- 3、7月29日、これを記念してサロンコンサートを開いた。今後年4回程度を企画したい。

4、7月9日～18日、5年に一度リーガで開かれる『歌と踊りの祭典』見学ツアーを会員他43名参加で挙行、全員無事帰国、大成功した。参加者全員が外務省主催のパーティに招かれるなど現地の政府や関係者の歓迎振りは素晴らしく、当協会の重要な立場をあらためて認識させられた。ウィーンでは現地で活躍中の野村三郎氏の協力を頂いた。

5、11月～12月 リガ大聖堂少年合唱団来日公演の後援を引き受けた。東京公演は12月10日。当協会関係者が主催する演奏会は北九州市(山本徳行顧問)、及び福島市(板垣忠直顧問)の2ヶ所。

③協会設立5周年記念演奏会(2009年)関連

来年の11月14日～15日頃、ラトビア独立記念日(11月19日)のあたりで考えている。演奏会を大規模なものとするか小規模とするかを検討中。大規模の場合、演奏曲の候補はガルータ作曲の『神よ、あなたの大地は燃えている』(テノール、バリトンソロ、パイプオルガン伴奏付き、50分の曲)。もう一曲は、バス

クス作曲の合唱曲「Dona nobis pacem」(オルガン付き)はどうか。(加藤)。具体的には東混の小林信一氏、ミリオンコンサートの小尾氏らとも相談したい。来年開催となると時間的余裕がないと思われるので、開催時期を来年に限定せずに少し時間をかけて検討し「5周年記念事業」扱いとしてはどうか、リーガで先に公演して、そのあと日本に持ってくれば成功度が高いのでは(岡村副会長)、などの意見、提案等を踏まえて検討を進めることとする。

④一般的事項

1、日ラ関西友好協会が設立される予定。9月末に大使館と会合を持った上で正式に決まる。(その後、名称は関西日本ラトビア協会に決定、事務局は在大阪ラトビア共和国名誉領事館)

2、神戸市リーガ市姉妹都市35周年。11月3日にリーガ市長等が来て祝賀会を行う。因みにリーガ大聖堂少年合唱団の神戸市主催の公演はない(山本顧問)。

※5周年記念事業のその後の経緯は10面の琥珀を参照下さい。(編集室)

理事会・レセプション出席者

藤井威会長、岡村喬生副会長、加藤晴生専務理事、遠藤守正、堀俊輔、松原千振各常務理事、迫秀一郎、西脇久夫、穎原信二郎各理事、稲山輝機監事、村山喜一郎、山本徳行各顧問、関口教和、金岡隆、中嶋勝彦各運営委員、(以上15名理事会出席)

ヴァイヴァルス大使他大使館員5名、NHK東京児童合唱団・加藤洋朗指揮者、同・堀紀子前事務局長、同・江田篤志現事務局長、浅妻勲、石川晴彦、石川弥貴、石川了、石渡

迪康、植木佐代、岡田敦、小川翠、小田陽子、小俣泰英、小山田安宏、加藤民子、神郡克彦、川島泰彦、熊谷敬子、桜井珊子、白井朝、清水光子、高仲和子、竹村洋美、田中享、萩原淑子、エドワード・オロウン(萩原さんのご主人+お子さん)、肘井哲也、堀口大樹、三巻義夫、三巻道子、宮崎勝治、宮崎栄美子、諸川政子、八木昌子、矢田廣、矢田寛子、矢田ちひろ、山中孟、山本慎一、早大グリーン学生2名。八千代松陰高生14名。(総計90名)

2009年度総会・新年会のお知らせ

専務理事 加藤晴生

日本ラトビア音楽協会はいよいよ創立5周年を迎えます。年頭恒例の総会・新年会を2月11日(祝)、正午からアークヒルズクラブ(赤坂アーカスビル37階)で開催します。詳細は改めてご案内いたしますが、万障繰り合わせて出席くださるようお願い申し上げます。

ラトビア共和国建国90周年祝賀レセプション

中曽根外相ら500余名が参集、 両国の更なる発展と永遠の友好を祈念

ラトビア共和国が11月17日に建国90周年を迎え、同国大使館主催の祝賀レセプションがこの日の午後6時半からホテルオークラで行われ、全国各地から同国とゆかりの深い500余名が参集して喜びを分かち合った。

ラトビアはソ連が崩壊した1991年に独立を回復したことはよく知られているが、国として成立したのは1918年、ロシアで革命が起きた直後だった。ラトビアが歴史に登場したのは10世紀初頭。悲惨ともいえるべき歴史の中で1度も国を作ったことがないラトビア人は、それでも美しいラトビア語をしっかりと保存し続けた。しかし、建国後もラトビアに不運が続いた。1939年、再びソビエト・ロシアの圧政下に入った。そして、1991年、遂に真の独立を勝ち取る。

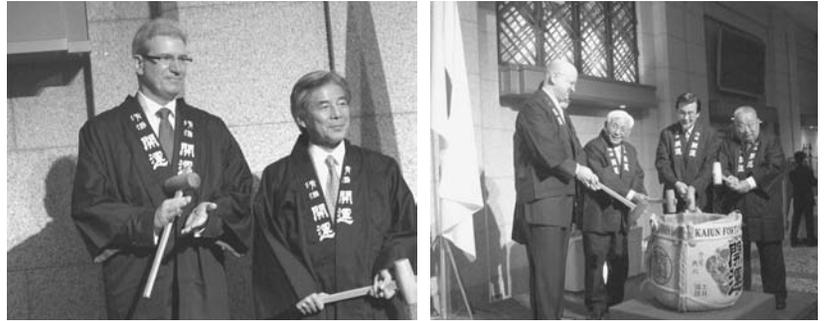
有名な「歌と踊りの祭典」はまだ

国として成立していない1873年に始まった。ラトビア人は文字通り歌の力で建国をなし得た民族である。

ラトビア人は90年前の建国記念日を大切にし、この日は本国はもちろん、世界中のラトビア人が、独立国家として尊厳を確立したことを祝う。今年は90年目という大きな節目を迎えた。



この日は日本政府を代表して中曽根弘文外務大臣の他、エストニア、リトアニアの駐日大使ら要人が多数出席したが、はるばる北海道や沖縄からも多くの日本人が参集したのは驚きだった。ヴァイヴァルス大使が着任以来、大使館員ともども全国各地を歩いて親睦を図り、ラトビアという国の魅力を伝え続けた成果が見事に結実したと言えよう。この間、沖縄、北海道、大阪に名誉領事館も



祝賀は日本式の鏡開きで開幕（11月17日・ホテルオークラ）
（左）中曽根大臣とヴァイヴァルス大使、（右）右から翁長、井下、東郷各名誉領事

誕生した。

開会前に会場入口で大使館員全員が一人一人から祝意を受けた。出席者の中には多くの当協会会員や、「歌と踊りの祭典」視察旅行参加者、ラトビア語教室生徒も含まれていた。

レセプションの幕開けはNHK東京児童合唱団による両国国歌演奏（加藤洋朗指揮）。続いてヴァイヴァルス大使が、「今日はラトビア人にとって神聖とも言える日、全国各地から多くの方々にお集りいただいたことを心から感謝したい」と格調高く挨拶した（別掲）。主賓の中曽根弘文外務大臣は「日本ラトビア議員連盟会長としても特別に親近感を持つ国。多くの日本人にラトビアを訪問して欲しい。来年は特命全権大使を派遣する。両国関係がさらに発展するよう力を尽くす」と極めてフレンドリーな口調で祝意を述べた（別掲）。

ここで再びNHK東京児童合唱団が登場、有名なR.パウルズ作曲「Vaska Pils（蜜蝋の城）」と、日本の代表的な歌「夕焼け小焼け」を鮮やかに演奏、歌の国のレセプションに相応しい清純な歌声が会場に響き大

拍手を浴びた。同合唱団とラトビアを結び付けたのは日本ラトビア音楽協会で、今年8月リガでの演奏会を成功させたばかり。

続いて日本式のお祝い「鏡割り」が行われた。二つの菰樽を、中曽根外相、ヴァイヴァルス大使、エストニア・リトアニア各大使、東郷武（大阪）・井下佳和（旭川）・翁長良光（沖縄）・クアン（ソウル）各名誉領事らが囲み、威勢よく割られた。

乾杯の音頭は加藤晴生・日本ラトビア音楽協会専務理事が指名され、両国の発展と永遠の友好を祈念。ここから祝宴に入った。この間、大使館の田中享顧問とオレグス館員が見事に進行役を務めた。

吟味されたラトビア料理とこの日の為に取り寄せられたチーズが、銘酒・BALZAMSや美味しいラトビアのビールにピッタリ。参加者は舌鼓を打ち、大満足しながら、時の経つのも忘れて心ゆくまで談笑を楽しんだ。そして一人一人が、両国の永遠の友情を心に刻み込んだ。大使館のグナさんが美しいラトビアの民族衣装で接待に当たり、盛んにフラッシュを浴びていた。（徳）



セレモニーはNHK東京児童合唱団の両国国歌演奏で開幕



乾杯の音頭は日ラ音協の加藤専務理事（右端）が指名された



セレモニーの進行役を務めた大使館の田中顧問（右）とオレグス館員



美しい民族衣装に身を包んだ大使館のグナさん（右）は人気の的



加藤N児指揮者（右）と松原常務理事が長々と音楽談義を続けていた

ヴァイヴァルス・ ラトビア大使挨拶

中曽根外務大臣閣下、ご列席の大使閣下、ご来賓の皆様、ラトビア共和国建国90周年に際し、ラトビア共和国ヴァルデス・ザルターズ大統領及びラトビア国民に代わりまし

て、天皇陛下、皇后陛下そして麻生首相に対しまして、心から深甚な敬意を申し上げます。

また今夕、大変ご多忙にもかかわらず、中曽根外務大臣閣下のご出席をいただきましたことを、心から感謝申し上げ

ます。

さらに、私は日本の皆様、とくに今夕、北海道から沖縄まで、また大阪から神戸、さらに福島から九州など、日本全国から、このレセプションに駆けつけていただきました皆様方に、心からあつく御礼申し上げます。



（次ページへ続く）

ヴァイヴァルス・ラトビア大使挨拶

(前ページより続く)

本日、ラトビア人は世界中で、民主主義と自由な市場経済システムを堅持していく決意を新たにしつつ、ラトビア建国90周年記念を祝っております。本日はラトビアが独立国家として尊厳を取り戻したことを祝う特別な意義をもつものでありますが、ラトビア人によってその意義はほとんど神聖ともいうべきものがあります。

日本・ラトビア関係につきましては、2006年4月ラトビア大使館が東京に開設され、昨年には天皇皇后両陛下がラトビアをご訪問されたという大変すばらしい慶事(けいじ)がございました。その後、ラトビアの名誉領事館が、沖縄、北海道、大阪の三か所に開設されました。これらの名誉領事館では、大変優れた方々が名誉領事となつていただき、各地における友好促進、文化交流、貿易、観光などについて、中心的な役割を果たしはじめております。

中曽根弘文外務大臣 (主賓) 祝辞

皆さんこんばんわ。先ずはラトビ

現在、日本・ラトビア間での人的交流は、閣僚レベルを含め日々増加しております。つい先週には、リガ市長一行が総勢70名あまりの代表団を率い、これまで訪日したラトビアの最大のミッションとして、東京と神戸を訪問したばかりであります。このように日本とラトビアとの関係は、着実な発展をとげ大きな成功を収めてきております。

将来、日本とラトビアの両国は、時として思わぬ試練にあつてもあるかも知れません。しかしながら私はこれまでの日本とラトビアが確立した良好な関係は、将来においても共通の未来であり、相互の尊敬と協力関係を基礎としたものであることを確信しております。

最後に、改めて本日の祝賀レセプションにご参加ご支援いただきました皆様に、心からあつく御礼申し上げますとともに、各国を代表されておられる方々につきましても、お国における平和、成功、繁栄を含め、さらなるご多幸を心からお祈り申し上げます。有難うございました。

ア共和国建国90周年記念パーティーがこのように盛大に行われましたことを心からお祝いを申し上げます。私は麻生内閣のもとで外務大臣

を務めておりますが、今日は外務大臣という役職とともに、日本ラトビア友好議員連盟会長の立場からも、喜んで出席させていただきました。丁度ラトビアにおきましては私と長年親しくしている大変な親日家のパブリクス

前外務大臣が友好議員連盟会長を務めており、これからさらに両方の議員連盟が緊密に連携をとって両国の発展のために尽くしていきたいと思っております。

2年前にもリガを訪問し、今年の7月にも伺って政府首脳とお会いしていろいろな問題を話し合いました。丁度その時は、135年の歴史を持つ「歌と踊りの祭典」の最終日でリガの街は参加者の熱気に溢れていました。古いヨーロッパの面影を残すアールヌーボーの素晴らしい街であり、さらに暖かい国民の皆さんに感動いたしました。是非日本の多くの方々にラトビアを訪問して欲しいと願っています。

日本とラトビアは1991年に新たな外交関係を回復しましてから、2006年に待望の大使館が設置され、



そのオープンセレモニーの時は私も出席いたしました。大使や大使館の皆さんのご活躍によりまして両国間の関係は着実に進展しております。また昨年は天皇皇后両陛下がラトビアを訪問され、両国間の親近感が飛躍的に深まりました。来年、我が国からラトビア共和国に特命全權大使を派遣いたします。すでに2006年からヴァイヴァルス大使が着任されていますが、ようやく我が国もラトビアに追いつくということになります。こういう大使の派遣を契機にして両国関係がさらに発展するよう、私も外務大臣として全力を尽くしてまいります。

終りにラトビア共和国の益々のご発展をお祈りしましてお祝いの挨拶とさせていただきます。おめでとうございました。

ラトヴィアの11月

黒沢 歩 (リーガ在住)

世界的な経済危機のなかで、ラトヴィアも今年は大変な経済停滞を迎えています。「ラトヴィアの銀行は健在だ」と、先月まで豪語していた金融専門家と国家要人が、ひと月後には発言をコロリと変えました。パレックス銀行は国の補填を初めて受け、国はIMFに助けを求めることになりました。国内総生産は、今年第3四半期にマイナス4パーセントに

後退し、来年度予算の引き締めが連日のニュースの話題となっております。町を歩けば、昨日まであったお店が空っぽで、市内の商店街は軒並みシャッター通りと化しています。2004年以降のバブルと今年に入ってから顕著な不景気は、まるで絵本のページをめくったかのように如実に観察されます。

◇

さて、ラトヴィアの11月は国家祝典が続く季節です。1年でいちばん恨めしいほど暗い天候ですから、経済停滞の輪がかかって暗い社会を

高揚させるにはちょうどいいのかもしれない。

まずは、11月11日の「ラーチュブレシスの日」。1919年11月上旬、第一次世界大戦も末期、帝政ロシアの残留軍人であるベルモント大尉が指揮した5万人の傭兵(うち4万人はドイツ人)軍がリーガを占領しようと攻め込みます。これに対し、市民は学生も学校生徒も志願兵となって、ダウガワ河を挟んで対峙しました。圧倒的多勢の傭兵を、ラトヴィアの独立を守ろうと燃える志願兵の小さな軍隊が圧勝し、これを機に敵軍はラトヴィアから撤退して行きました。これを記念して、民族英雄の叙情詩「ラーチュブレシス」の名前を冠したラトヴィア軍の式典となりました。

天候はかなり冷えてくる時期ですが、いまま小さな軍事パレードを見に、多くの人々が集まります。この日が近づくと、テレビでは市民に「あなたは愛国心をもっているか」、「もし戦争があったら、あなたは戦うか」というような、ギョッとさせられるような質問をしていますが、この国ではそれはごく当たり前のことのように。「私の孫たちも立派

な兵隊になってもらいたい」と、年老いた女性の口からごく自然に出たことばに、歴史の違いを感じずにはいられません。

◇

11月18日はラトヴィアの独立記念日。今年は建国90周年ということで、例年に増して盛大な祝典が準備されました。90周年ということは、ソ連体制下にあった50年の間も国の主権が存続していたと見なされるのです。独立記念日式典行事の一環では、アリーナ・リーガという大きなスタジアム形式のドームでマーラーの交響曲第8番がおおがかりに演奏されます。私は同じ夜に「魔笛」の新作オペラを観に行きます。この夜には、アムステルダムの交響楽団のコンサートも大ギルドであり、行事はいつも重なってしまうものです。

夏の合唱祭と11月の国家式典という今年の大イベントがどれも幻影のように終わってしまうと、景気停滞がひしひしと現実のもととして実感されるのがクリスマスセールなのでしょう。そして、いよいよ厳しくなると予測されている来年へ。次の景気回復は2010年となるそうです。



第一次世界大戦の戦没者を埋葬する「兄弟墓地」のモニュメント

ヴァイヴァルス大使を関西学院にお迎えして

池田 裕子

(関西学院 学院史編纂室)

ペーテリス・ヴァイヴァルス大使を関西学院にお迎えする日がやってきました。高等学部（文科・商科）で英語を教えていたイアン・オゾリンの辞職は1921年のことでしたから、関西学院にとっては、87年振りにラトビア人の訪問を受けることとなります。ラトビア共和国が独立を宣言して90年目に当たる記念すべき年に、初代駐日大使が関西学院を訪問されることを知ったら、オゾリンはどんなに喜ぶでしょう？！

10月10日午前10時10分、永田雄次郎学院史編纂室長と私は兵庫県公館に到着しました。前庭には、ラトビア国旗と日の丸が掲げられていました。現在、大使は知事を表敬訪問されているのです。室長と私は、公館の美しい庭を散策しながら大使を待ちました。

10時半過ぎ、大使と大使館員オレグス・オルロフスさんが出て来られました。関西学院の公用車に、運転手を含め大人5人が乗り込むと、後部座席は密着状態です。少しでも足元を広くするため、助手席を目一杯前に出し、その後ろに大使にお座りいただくことにしました。その横で、オレグスさんと私は小さくなって座りました。一国の代表をお迎えするには申し訳ないような狭さでしたが、気さくな大使は笑顔で乗り込んでくださいました。

ここから西宮市にある関西学院までは約1時間のドライブです。その途中、神戸文学館に立ち寄り。オゾリンが教えていた当時、関西学院は原田の森（現在の神戸市灘区）にありました。そこは現在、神戸市立王子動物園（リガ市から寄贈されたインドゾウ「ズゼ」がいます）になっています。そして、当時ランチ・メモリアル・チャペルと呼ばれていた建物が今は神戸市の所有となり、神戸文学館となっているのです。

神戸文学館では、山本幹夫館長と学芸員の義根益美さんが迎えてくださいました。ここで驚いたのは、大使が日本文学に大変詳しいということです。実に多くの作品をお読みになっていて、今年は逃したけれど、村上春樹にぜひノーベル文学賞をおっしゃいました。「村上春樹は神戸の隣の芦屋市の出身です」との館長の説明に、大使は一層関心を深め

られたようでした。

文学館の中で神戸出身の文学者やオゾリンの話をした後、「それでは、記念撮影をしましょう」と言って外に出ました。石垣に刻まれた『関西学院発祥之地』の文字を目指して階段を下りた時、一人の外国人青年が通りかかりました。青年の胸に「ヤーニス」という名札が見えました。そこで、オレグスさんが声をかけられると、何とこの青年はラトビア人だったのです！しかも、「ヤーニス」はオゾリンのファースト・ネームです。ヤーニス君は日本を旅行中で、東京から歩いてここまで来たそうです。

この思いも寄らぬ奇跡的邂逅に、皆、言葉をなくしました。人間の力の及ばない、大きな不思議な力が働いているとしか思えませんでした。大使は「池田さんが呼び寄せたに違いない」とおっしゃいました。「いいえ、オゾリンが引き合わせてくれたのだと思います。だって、名前が同じですから」と私はお答えしました。「ここはラトビア人をひきつける特別な場所かもしれない」と大使は感慨深げでした。

「ラトビアのことを書いた本を大使館から寄贈するので、文学館の中にラトビアのコーナーを作ってもらえないでしょうか？」と大使は山本館長に申し出ておられました。「できれば、そこにオゾリンの紹介文も付けてください」と私からもお願いしました。館長も義根さんも「ぜひ、そうしましょう」と言ってくださっていましたが、このヤーニス君との邂逅により、それはそうすべき必然があるように思われました。

印象深いひと時を過ごした神戸文学館をあとに、西宮市に向かいました。関西学院でお会いいただく方々のことを説明している内に、車は西宮上ヶ原キャンパスに到着しました。正門に入って学院本部前で車を止め、院長補佐の舟木讓先生の歓迎を受けました。3階の院長室にご案内すると、外務省の天江喜七郎参与（関西日本ラトビア協会会長）は既に到着されていました。

ルース・グルーベル院長主催の歓迎昼食会は12時45分からです。大使は、5月に行われた大阪ラトビア共和国名誉領事館開設記念レセプションで、院長とは既に顔を合わされています。理事会から駆けつけられた院長としばし歓談された後、2階に用意された昼食会場に向かいま



講演する大使(左)と通訳のオレグスさん[写真はすべて関西学院 学院史編纂室提供]

した。ヴァイヴァルス大使、オレグスさん、天江さんをお迎えしての昼食会への関西学院側出席者は、グルーベル院長、畑静子前院長夫人（オゾリンを関西学院に紹介した畑歎三の息子の妻）、杉原左右一学長以下9名でした。

アメリカの南メソヂスト監督教会が創立し、後にカナダ・メソヂスト教会が経営に参加した関西学院では、今も会議開始時や食前に祈りをささげる習慣があります。食事を前に、宣教師でもある院長が祈りの言葉を口にされると、皆目を閉じて下を向きました。前もってこのことを大使館にお伝えし、大使には祈りの習慣

はないけれども関西学院のやり方を尊重するとの回答を得ていた私は、こっそり目を開けて大使がどうされているか確認しました。すると、大使もしっかり目を開けておられました！

昼食会での会話は、最初から最後まで英語でした。院長はアメリカ人ですから、英会話に何の支障もないのは当然ですが、その他は日本人7人、ドイツ人1人です。戦前は「英語の関学」と言われていたらしい関西学院ですが、そんな看板はとっくの昔に下ろしています。それでも、大使をお迎えするということが、出席者は持てる以上の力を振り絞ったのでした。

今回の準備をする中で、産業研究所のホルガー・ブングシェ先生のお父様（88歳）がベルリン生まれ、ラトビア育ちのドイツ人であることを知りました。関西学院の中でやっと見つけた唯一のラトビア関係者です。ブングシェ先生は、お父様からお聞きになった体験談をご披露くださいました。また、畑静子さんは、



原田の森にある神戸文学館に立ち寄り、偶然通りかかったラトビア人青年ヤーニス君と奇跡的な出会いがあった（左から2人目）



ソ連時代に関学交響楽団がラトビア演奏旅行をした時の写真感慨深く見る大使ら

3月に亡くなったご主人（前院長）が、ソ連時代に関西学院大学交響楽団演奏旅行でリガを訪問された時の写真をお持ちくださいました。

大使は、オゾリンに関するラトビア語の資料を院長と私にプレゼントしてくださいました。ラトビア語は全くわからないながらも、じっと見ていたら、意味が推測できそうな部分もあって、『ターヘル・アナトミア』を前にした杉田玄白の心境です。10年間恋焦がれてきたオゾリンのことが書かれているというだけで、私には光り輝いて見えました。

食後は、院長と室長によるキャンパス・ツアーです。話が弾み、昼食会が20分以上長引いたため、お見せできたのはハミル館だけでした。旧キャンパス原田の森から移設されたハミル館は、オゾリンがいた当時、高等学部文科の校舎として使われていました。現在は心理学の研究室になっています。ここで、名誉教授の宮田洋先生が何故か見事なポーランド語でご挨拶され、大使は度肝を抜かれた様子でした。

(次ページへ続く)

ヴァイヴァルス大使を 関西学院にお迎えして

(前ページより続く)

ハミル館を出られた大使とオレグスさんは、スパニッシュ・ミッション・スタイルと呼ばれるキャンパスをお歩きになって、「ここは日本ではないみたいですね」とおっしゃいました。

キャンパス・ツアーの後は、いよいよ関西学院大学主催特別講演会「バルト海の真珠ラトビア、EUの一員Latvija - Baltijas pērle Eiropas Savienībā」です。会場は、この春できたばかりのG号館101号教室。講演会のことが読売新聞と朝日新聞で紹介されたため、学生だけでなく、一般の方にもお越しいただき、200名程集まりました。

杉原学長の挨拶のあと、ラトビア紹介のDVDを約10分間流しました。そして、大使と通訳オレグスさんの登場です。大使から関西学院でご講演いただけるとの話をお受けした時、英語か日本語通訳付きのラトビア語でとのご提案でした。講演会を協賛する経済学部と相談したところ、迷うことなくラトビア語でお願いすることになりました。講演会参加者から「大使の話される美しいラトビア語の響きに魅了された」との声が寄せられましたから、この選択は大正解だったと思います。

私自身は、中座している時間もあつたため、講演内容の詳細をお伝えすることはできませんが、いくつか印象に残った言葉を挙げてみましょう。「皆さんはラトビアを遠い国とっておられるかもしれませんが。しかし、日本とラトビアは案外近いのです。両国の間にはロシアがあるだけです」「なぜラトビアのことが日本で知られていないかというと、ソ

連時代、鉄のカーテンで覆われていて、内部で行われていたことが全く漏れないようにされていたからです」「これまでの経験から、私たちはロシア人のことを知り尽くしています。ロシアのやり方を熟知しているし、ロシア語も自由に話せます。そんな私たちの力をぜひ活用してください。例えば、日本がロシアと直接取引した場合は、ロシアの税関で荷物が2週間とめられます。ところが、ラトビアを経由すれば、それを半分の1週間にすることができるのです」「私たちにあって音楽は空気みたいなものですから、なぜラトビアで音楽が盛んなのか、その理由を説明するのは困難です。ただ、他国の支配を受けている期間が長かったため、言葉にするのが許されないこと、例えば、『ドイツ人は嫌いだ』とか『ロシア人に虐められた』という内容を歌にしてみました」「民族、言葉、宗教の異なる人々と共存する状態がラトビアにとっては常にノーマルなことだったので、それが特別なこと、難しいことだとは思っていません。

一方通行で終わるのではなく、来場者からの質問に答える時間を多くしたいとの大使のご配慮のおかげで、活発な講演会になりました。質問のひとつひとつに、ユーモアを交えながら、丁寧に、誠実にお答えになる大使の紳士的態度と、オレグスさんの当意即妙の通訳、フロアとの見事なやりとり、お二人の抜群のコンビネーションに、参加者は引き込まれました。質問が次から次に出たため、途中で打ち切らざるを得なくなってしまったのは心苦しいことでした。講演終了後、大使とオレグスさんに声をかける人々が群がり、大変な人気でした。オゾリンもどこか



昼食会後の記念撮影 大使、院長の後は左からオレグスさん、ブングシェ准教授、天江外務省参与、杉原学長、竹本経済学部長、伊藤同教授、畑前院長夫人、永田学院史編纂室長、筆者（池田）、舟木院長補佐

らか、見てくれていたでしょうか？

帰りは、グルーベル院長、杉原学長、山内一郎前理事長、永田室長等に見送られながら、再び関西学院名物(?)ぎゅうぎゅう詰めの公用車にお乗りいただき、新大阪駅までお送りしました。3連休前夜のみどりの窓口は長蛇の列で、オレグスさんはびっくりされました。「大使は普通の方ではないからグリーン車でしょう?グリーンならすぐに指定が取れるから大丈夫」と耳打ちすると、「グリーンには乗りますが、大使は普通の人です。特別な人ではありません」とオレグスさんはきっぱり否定されました。関西学院にお迎えするに当たって、ぎゅうぎゅう詰めの公用車以外にも数々の失礼、不手際があったことと思います。大使はすべてを包み込み、いつも笑顔で、その場の空気を和ませて



院長室での談笑風景



院長と緑濃いキャンパスを散策
院長はノルウェー系アメリカ人で話が弾んだ

くださいました。そんな大使は、私にとってやっぱり「特別な存在」です。

【編集室追】当日の様子の一部が10月31日、BSジャパンの番組「大学が変わる。現場へ」で放映された。

🎵 短信

今年も大人気、
ギドン・クレーメル来日公演



演奏会終了後大使館で開かれた
仲間内の打ち上げ会

日本でも絶大な人気を誇るギドン・クレーメルが、クレメラタ室内楽団を率いた演奏会が9月25日にオペラシティコンサートホールであった。ウィークデイのマチネーであつ

たにもかかわらず聴衆は満員。チケットは早くから完売だった。一行は金沢で9月15、18、20日の3回、9月23日に大阪、24日に名古屋でコンサートを開きいずれも好評だった。東京公演の後は関係者が大使館に集って打ち上げ会が行われた。

JATA世界旅行博2008にラトビアも
ブース開く

銘酒・バルサム試飲が大人気

9月19から21日までの3日間、東京ビッグサイトで「JATA世界旅行博2008」が開催され、136の国と地域が参加し、入場者はほぼ11万人に達する人気を博した。ラトビア共和国政府観光局もブースを開き、オレグス大使館員



ラトビアのブースで

らが訪問者にパンフレットを渡して観光客誘致のPRに務めた。ラトビアの銘酒・バルサムの試飲会は瞬間に飲み干される大人気だった。日本人のラトビア訪問はまだ少ないが、JTBが本腰を入れることもあり、今後、急ピッチで増えることが期待できる。

藤井会長が09年カレンダー寄贈

カメラが得意な藤井威会長が、今

年も自ら撮影したバルト・北欧7カ国の写真で09年カレンダーを作成し、100部を協会に寄付された。出来れば1部1000円(送料含む)で販売して、協会財政に寄与して欲しいという意向。ご希望の方は頼原理事宛お申し込みください。

FAX: 042-565-1839

メール: e.shin.1108@peach.ocn.ne.jp

大使館からラトビアの絵葉書セット寄贈

ラトビア共和国独立宣言90周年と、リガ・神戸姉妹都市提携30周年を記念して制作された絵葉書6枚セット50組が協会に寄贈され、希望者に無料配布する。お問い合わせは上記頼原理事へ。

あこがれの国ラトビアへの演奏旅行

HNHK東京児童合唱団 常任指揮者 金田 典子

今年夏、私たちNHK東京児童合唱団シニアクラス約60名（小学5年～中学2年）は8月14日あこがれの国ラトビアの地に入りました。5日に日本を出発して、ハンガリー（ブダペスト、ケチケメート）、スロバキア（ガラント）、オーストリア（ウィーン）、ドイツ（フランクフルト）と演奏と交流をして回り、ようやく10日目の入国でした。

今回の目的は2年前、指揮者のアイラ・ビルジーニャ先生をお迎えして私たちの定期演奏会を行いました。その時アイラ先生と語った、「いつかラトビアへ行って一緒に歌いたい。」という夢を叶えるためでした。それがこの度実現することになったのです。空港でアイラ先生は大きなヒマワリを持ってカットイ先生とご一緒にお出迎えくださいました。2年ぶりの再会でしたが、昨日別れたばかりというような感覚を覚えました。子どもたちはそろそろ旅の疲れも見え隠れしている頃ではありましたが、いざ最終目的地のラトビアへ着き、残された数回のコンサートと思うと皆表情は明るく生き生きとしていました。

翌日はアイラ先生の合唱団「リガドーム少女合唱団」の皆さんとジグルダへピクニック。一緒に鬼ごっこをしたりお弁当を食べたり・言葉はわからなくてもやっぱり音楽する者同士、すぐに仲良くなっていました。トゥライダ城前の広場では一緒に交流コンサートを行い、観光でいらしている方々にも聞いていただき喜んでいただきました。

そして8月16日。この旅最後のコンサートの日、私たちの演奏旅行もこれまでの旅の総まとめであり、一番の目的であったラトビアでの演奏となりました。この日は2回の演奏会の機会を得ました。まず昼間にはリガの中心地にあるヴェールマス公園で行われている「リガ祭り」での演奏。良いお天気の中、子どもたちは浴衣や半纏を着て会場へ入ってきましたのでそれはたくさんカメラに追いかけられました。ここでは野外コンサートということもあり、子どもたちの演奏の時には広い会場いっぱいのお客様。客席だけでは足らず、カメラを持ったお客様が何重にも周囲を囲んでしまうほどの盛況ぶり。演奏もそんな歓迎の中、大変喜ばれ大きな拍手の中ヴェールマス

公園を後にしました。そしていよいよ本当にこれが最後。聖ペテロ教会でアイラ先生とリガドーム少女合唱団との演奏会。こちらでも宣伝をたくさんして下さっていたことから、千人を超えると思われるお客様で溢れました。演奏は私たちとリガドーム少女合唱団それぞれの演奏に加えて、ラトビアの曲「蜜蝋の城」「風よそよげ」そして日本の曲「金比羅船々」「夕焼け小焼け」を合同で演奏。教会いっぱい広がる響き。感動の涙があちこちで見られました。

今回の旅では音楽を通して多くの方々と温かい交流をさせていただくことができました。このことは私たち大人も含めて、団員である子どもたちの心に永遠に残ることでしょう。多くの方々のご協力と励ましをいただき大変貴重な経験をさせていただくことができましたことに深く感謝申し上げます。ありがとうございました。こどもたちは帰ってきてすぐまた行きたくなくなっていたようです。（2008.11.17 記）

N児、ラトビアでリガ少女合唱団と素敵な交流

お馴染みのアイラ女史から便りと写真届く

NHK東京児童合唱団のラトビア訪問について、お馴染みのアイラ女史から次のような便りと写真が届いた。

◇

NHK東京児童合唱団が、8月14日から17日までラトヴィアが訪問し、リーガとシグルダでは楽しい日々を過ごせました。天気も程よい暑さで日も出ていました。

聖ペーテリス教会でのコンサートでは、反応がよく、様々な層の聴衆にも恵まれました。

主としてNHK児童合唱団が歌いましたが、コンサートでは私のRDMK（リガ大聖堂少女合唱団）も歌いました。

8月15日には、トゥライダ城で昼間のコンサートも行われました。ここでは合唱団合同で仲良くピクニックや遊びをしました。子供たち、青年たち共に、雰囲気も大変仲良く明るかったです。

もっとも大切な事は、子供たちの間で素直でよい雰囲気があったことです。

子供たちは共に笑い、かけっこを



リガ大聖堂少女合唱団と記念撮影 前列中央は左からアイラさん、加藤、金田両指揮者し、遊び、写真を撮りあったり、プレゼントを交換しあっていました。通訳としてカットイさんと彼の教え子のユリアがいてくれました。

今回のプロジェクトが成功してとてもうれしいです。

数年前のことですが、NHK児童合唱団を私に紹介して下さったことに対し加藤さんに感謝をしています。やはりこういったことは日本とラトヴィアの文化交流の輪を広げますし、世界の様々な国の人々の相互理解を助けてくれますね。

こんな若者の皆が大きくなり、世界での戦争や憎しみ、暴力を望まないような人になることを願っています。

リーガでのコンサートの様子は、今行われているリーガ祭に関連し



リガ大聖堂少女合唱団と合同演奏



両合唱団がトゥラウダ城で演奏会とピクニックを楽しむ



金田典子指揮者（著者）



加藤洋朗指揮者



トゥライダ城前で野外演奏

ラトビアの合唱に魅せられて

八千代松陰高校合唱部 山本 慎一

私が顧問を務める八千代松陰高校合唱部は、現在75名で活躍する混声合唱団です。国語科の教諭として赴任し、以来24年間、合唱部とともに歩んでまいりました。

合唱部は学校教育活動の一環ですので、国内外、時代、ジャンルを問わず、できるだけ多くの音楽に触れるようにしています。しかし、近年、私個人の趣味・嗜好も少しだけ反映

されているのは否めません。10年ほど前、ラトビアの合唱に出会い

（と言っても行った方のお話ですが）、来日した合唱団の演奏にも触れ、次第にラトビア曲に傾倒していききました。CDや楽譜も揃え、6年からクラブでも演奏するようになりました。

最初に歌ったのが「PŪT VĒJINI」（風よそよげ）（イマンツ・ラミンシュ編曲）でした。この年から連続で、千葉県合唱アンサンブルコンテスト

で、ラトビア民謡（時には現代曲も）を演奏しています。この間「DZIEDOT DZIMU DZIEDOT AUGU」（歌いながら生まれ、歌いながら育った）、「IK RĪTINU KUMELONU」（毎朝、馬を）、「RĪGA DIMD」、「GĀJPTNI」（渡り鳥=現代曲）などにも（次ページへ続く）



ラトビアの合唱に魅せられて

(前ページより続く)

挑みました。

2005年からは、コンクールの自由曲としても候補にあがるようになり、女声合唱にも取り組みました。「DIPTIHS」、「MELODIJAS」等です。2008年3月には、福島で行われた第1回声楽アンサンブルコンテスト全国大会に県代表として出場、新しい曲も加え、全てラトビア曲でプログラムし、銅賞を受賞しました。同年8月には、全国高等学校総合文化祭群馬大会に出場、ラトガレ民謡「MŌTE DELENU AUKLĒJA」(母は息子を育てた)(ユリス・ヴァイヴォツ編曲)を披露しました。

私はラトビアの地を訪れたことはありません。ガイドブック片手に、CDを聴き、発音記号と英訳された

詩を頼りに楽譜に向かう、そんな程度でしかアプローチできていません。それでも部員は、曲を通してイメージする広大で美しい風景、人々の生活、その喜怒哀楽に思いを馳せながら、生き生きと歌ってくれます。私と同様、ラトビアの音楽に魅せられたようです。

本協会が設立された頃、全日本合唱連盟が発行する『ハーモニー』誌上で、その存在を知りました。毎年、私たちのプログラムにあがってくる事実を考えて、賛助会員に加えていただきました。これまで様々な曲に触れてきましたが、まだまだ知らない曲が多い私たちにとって、『日本ラトビア音楽協会ニュース』で知る情報や皆さんのお話は、たいへん興味深いものです。会員は私個人ですが、合唱部ともども、今後ともよろしく願い申し上げます。

全日本合唱コンクールへ挑戦

女声合唱団フラウリッヒ・ヴォカール近況報告

団長 赤池 喜代

去る8月31日(日)徳島文化センターにて全日本合唱コンクール四国支部大会が開催されました。私たちフラウリッヒ・ヴォカールは県下で開催されるということで、兼ねてからの「一度はコンクールの舞台のってみたい…」と、初めて



一般A部門(32名以下)に出場しました。結果、6団体出場のうち、金賞1、銀賞3、銅賞2。私たちは何とか銀賞を頂くことが出来ました。普段から、誠実に音楽と向かい合うこと、楽器としての体づくり、言葉を伝える、ということに心がけて練習してきました。音楽に対する方向性は認めていただいたとして、まだまだ表現するパワーが足りないと感じました。金賞の演奏を目指して、また頑張りたいと思います。

このコンクールでも自由曲はラトビアの合唱曲を演奏しました。「メロディー」と「麻すきのうた」です。「メロディー」はロマンチックなメロディーと優雅で透き通るハーモニーが魅力、麻すきのうたはラトビア語のリズミカルな音をモチーフにカノンやリズムの変化を楽しめる曲。様々に変わるテンポは麻すきの仕事のスピードを表しているとか、「うまく出来たらビールをあげる、出来が悪かったら泥水だよ」と。自由曲をこれらの曲にしたのは私たちの合唱団ならではのカラーを出した

かったから。ラトビアの合唱曲に取り組むようになってから、単に音やリズムだけでなく、背景にある暮らしや歴史にも興味を持つことができました。麻すきってどうやるのかしら？ラトビアの人たちはどんな暮らしをしているのかしら、と。

7月のラトビア旅行はそんな夢をかなえてくれました。私の想像していた通り、ラトビアは澄み切った空気の中、歌声と美しい花々にあふれる国でした。「歌と踊りの祭典」はその規模と素朴さにびっくりしました。あんなに大勢の人々が集って、踊り、歌い…。最終日、日付が変わっても途絶えることも無く続く、何万もの人々合唱、その響きのなかに私もずっと浸っていたかった。深い森の中、歌声と湧き上がる歓声がいっつもいつまでも続いています。(最後まで名残惜しく会場に留まっていたのは私たちです…)

言葉も違う人たちと何かを共有することは大変なことかもしれませんが、でもあの場所であの響きの中で

確かに感じ通じ合うものがありました。私は歌うこと、合唱をするということはその言葉をこえたものを共有できる一つの方法だと思っています。おかささんコーラスの舞台であれ、コンクールの舞台であれ、また小さな小学校への訪問演奏であれ、

通じ合う歌の言葉の輪を拡げて行きたいとおもいます。もちろん、ラトビアというまだまだ十分に知られていない国のこと、素敵な民謡の数々をこれから勉強して紹介していきたいとおもいます。

ラトビアの新作オペラ「サルカンス」がオペラ・コンクールで大賞を受賞

ゼメネ音楽企画 菊地 康則

ラトビア新世代の作曲家アニトラ・トゥムシェヴィツァが、ノルウェー・ボデ市で行なわれたオペラ・コンクールに新作オペラを出品し、見事優勝を果たしました。

北欧を中心とする19名の作曲家の作品に対する選考は去る10月9日に終了し、アニトラの作品に対する大賞および聴衆賞の授与が決まりました。ラトビア音楽情報センターの公開情報によると、来年秋にはノルウェー語版の全曲上演が企画されているとのことです。

大賞が授与された室内オペラ「サルカンス(赤い色)」の台本は2005年のパリ郊外暴動事件に基づくとのことで、私はこの夏にアニトラから地元での試演会の録画を見せてもらっていました。リガで彼女に会った際、「私はいつも頭の中で音が鳴っている。人のイメージを浮かんだ音で曲にする。That's my life」と語っていました。それは登場人物を音で表すオペラの創造に生かされているのでしょうか。音の色彩感を重視したシンプルな音楽は審査員の関心を惹いたのではないかと思います。

1971年生まれのアニトラは現在ラトビア音楽アカデミーに在籍する



アニトラ・トゥムシェヴィツァ(ゼメネ企画提供)

院生ですが、先に同アカデミーのヴァイオリン科を卒業した演奏家でもあり、作曲家としてはすでに多くの作品を発表しています。最も得意とする分野は室内アンサンブルおよび管弦楽で、楽器の音色を使い分ける手腕は広く認められており、編曲の依頼も来るようです。

彼女は数年前、私が音楽アカデミーに紹介した日本のオーケストラ作品に関心を持ち、それを契機に私とのコンタクトが始まりました。アニトラは友人たちの多くの作品・音源を自作とともに紹介してくれましたが、それは私が2005年のラトビア音楽コンサートでアニトラとグンデガ・シュミッテのフルートソロ曲を演目を選ぶきっかけとなりました。強烈な個性いっぱいのアニトラのオペラが、いつの日か日本にやってくることを願っています。

Anitra Tumsevaの音楽ページ：
<http://www.myspace.com/anitratumseva>

日ラ音協HPリニューアル中

Latvia編集室とサイト管理者・鈴木啓介が緊密に連絡をとって当協会HPをリニューアル中です。

①表紙の写真が次々に変わります。興味深いラトビア関連写真を数多く用意しました。②トピックスを頻繁に更新して新しい情報をお届けします。③詳しい当協会の案内が掲載されます。④「Latvija」バックナンバーを全て読めるようにします。⑤会員宛のお知らせ

ページを新設します。⑥ラトビアの代表的な民謡・歌を聴けるように交渉中です。

会員の皆様からの情報を編集室へ原則としてメールでお送りください。スピーディーに掲載します。カラー写真を歓迎します。

完成まで若干の時間がかかりますが、下記アドレスを「お気に入り」に加えて定期的に目を通してくださるようお願い申し上げます。

<http://jlv-musica.net/latnews/index.php>

若い受講生も増え、ますます活況

ラトビア語教室第3期報告

事務局 植木佐代

ラトビア語教室第2期は、今年の1月から6月まで、第1・3週入門コース、第2・4週初級コースの2クラス編成になり、隔週で行なわれていた第1期と違って、毎週大使館を使わせて戴くようになりました。そして、7月の旅行には、堀口講師をはじめ、第1期・第2期受講生合わせて7名が参加し、様々な場面で、日頃の学習の成果を活かすべく、挑戦しました。また、旅行の前後の7月



最近の教室風景

は、第2期を延長する形で補習の授業を組みました。

そして、8月から第3期がスタートしました。外国語を学ぶことについて、「学びたいと思う意欲が強ければ強いほど」、「実際にそれを活かす場面が多ければ多いほど」言葉は身につくこと、そして常に学び続けることが大切と日頃から教えて下さる堀口講師の強いご意向を受け、受講生のご理解も戴いて、第3期はクラスを一つにまとめ、毎週授業を行うことになりました。当初は入門・初級それぞれのクラスの継続の方11名でスタートしましたが、堀口氏が東京外国語大学で行なったサマースクールを受講生の内3名が9月から加わり、現在は高校生から社会人まで14名が熱心に学んでいます。そして、10月に1名、11月～12月にかけて1名の方が、実際にラトビアに出かけて



毎月5週目は親睦会、この日はラトビア人ゲスト6名が参加された

います。

5週目は授業がないのですが、教室はこの日を、いつもゲストでいらして下さるラトビアの方や受講生同士が親睦を図る貴重な機会と考えています。10月の親睦会には、ゲストの方が6人もいらしてくださいました。また前週に来日されたリガ市長から、大使館を通してBALZAMSがプレゼントされました。なお、12月

10日は、東京カテドラル聖マリア大聖堂で行なわれる「リガ大聖堂少年合唱団」のコンサート鑑賞に授業を振り替えることになっています。

先日のラトビア共和国建国90周年のレセプションには、受講生全員をお招きくださり、大使並びに大使館のご配慮に感謝し、紙面をお借りして心からお礼申し上げます。

リーガは「里賀」

白石 仁章

外務省大臣官房外交史資料館

今回も黒沢歩氏の『ラトヴィアの蒼い風』からヒントを頂いたのだが、同書によればリーガで日本語学校を独力で設立し、今では日本語学習塾を運営されているブリギッタ・クルーミニャさんが長年にわたる努力の結果、日本語とラトヴィア語の辞典(全2巻)を編集されたそうだ。その際に、ラトヴィアを漢字で「良登美野」と表し、編集された辞典は「和良辞典」と名付けたとの由である。黒沢氏は「この独創的な当て字からは、自然の美しい母国に込める編者の愛情が伝わってくるようです」(同書18頁)とあり、筆者もラトヴィアの美しい景色が目浮かぶような気がして、素敵な当て字だと思う。

では、リーガはどうなるのでしょうか?実は、戦前の日本ではリーガを「里賀」と漢字表記していた。当時の文書には、今ならば当然カタカナで表す外国の地名も漢字の当て字で表記することが多かったので、リーガには「里賀」の当て字が用いられていたのだ。

と、ここまで書いて、一つ不思議というか、興味深いことに思いが至った。戦前期の文書では、ラトヴィアという国名に関しては当て字が用

いられず、カタカナで表されたが、リーガは「里賀」という当て字が用いられた。これは極めてレアなケースに属する。第一次世界大戦前から独立国であり、日本と国交のあった国は国名、首都名ともに漢字の当て字表記が用いられている例が多い。例えばアメリカは亜米利加、ワシントンは華府。イギリスは英吉利、ロンドンには倫敦(龍動という表記もある)。フランスは仏蘭西、パリは巴里などだ。しかし、第一次世界大戦後に独立した諸国の場合には、国名は当て字で表記しても、首都名までは漢字表記されていない例が多い。例えばポーランドは波蘭、チェコスロバキアは知恵古、フィンランドは芬蘭だが、ワルシャワ、プラハ、ヘルシンキはそれぞれカタカナ表記され、当て字が用いられている例を見たことがない。また、ラトヴィアと同じバルト三国に属するリトアニア、エストニアについては、国名も首都名も漢字表記を見たことがない。

筆者が今日まで見た範囲で国名の漢字表記はないが、首都名は漢字で表記されていたという例はラトヴィア&リーガ以外に例を見ないのだ。これは何故なのであるか?ここからは、筆者の推測に過ぎないが、日本の有名な外交官上田仙太郎の存在があるのではないと思われる。上田仙太郎は、日本とラトヴィアの関

係を考える上で、忘れてはならない人物の一人と言えよう。明治維新の年(1868年)に生まれた彼は、ロシア語を学び、ロシアに留学していたが、日露戦争の勃発(1904年)により帰国を余儀なくされ、翌年外務省に入省し、ロシア通の外交官として知られていた。その彼が、ロシア革命後在ポーランド大使館の一等書記官を務めながら1923年から26年までリーガに出張し、ソ連政権の動向を詳細に報告した。その記録は、「里賀情報」(外交史料館所蔵、分類

番号:1.6.3.36、全4冊)として残っている。公使館の開設前に、上田が出張しリーガに長期滞在したため、リーガに当て字をつけたのではないと思われる。

それにしても、「里」という人々が安らかに暮らすイメージの字、そしてめでたい「賀」という字を用いたことに、独立したラトヴィアへの祝福と人々の平和な生活を祈る気持ちが当時の日本人にあったのではないか、そのように信じたい。

リガ・神戸姉妹都市35周年
リガ市使節団(70名)来日

リガ・神戸姉妹都市35周年記念「リガ祭り」を開くために11月5日、ビルクス・リガ市長を団長とする約70名の使節団が来日した。公的機関の使節団としては両国交流史上最大規模。この日は市長、同市外交局長、文化局長らとヴァイヴァルス大使も同行して石原都知事を表敬訪問。3時からANAインターコンチネンタルホテルで「リガ観光セミナー」を開催、予想をはるかに上回る120名が出席してラトヴィアへの関心の高さをうかがわせた。夜は同ホテルで市長、大使主催によるレセプションが行われ、日本側から主として運輸・旅行観光業関係者が約200名出席して盛会だった。レセプションは

民族音楽学者ムクツパーヴェルス博士夫妻によるコークルと歌の演奏で始まった。この日、リガ観光局とJTBが観光促進のための協定を締結した。

一行は翌6日、新幹線で神戸入り。神戸市長、同商工会議所会頭を表敬訪問し、夜は矢田神戸市長主催の歓迎パーティーに出席。

7日からは神戸・リガ姉妹都市にみる自治体プロジェクトに関するセミナー、大阪商工会議所との懇談、ビジネスセミナー・リガはCISマーケットへのゲートウェイ、神戸市「リガの森」で植樹、白鶴酒造醸造博物館・王子動物園など視察、京都観光、ラトヴィアが誇るアカペラグループCOSMOS演奏会鑑賞(別掲)など多彩なスケジュールを消化し、10日、関西空港から離日した。

コンサート短評

岡村喬生 喜寿記念日に歌う、
想い出の歌
圧倒的なボリューム、感動の嵐



日本が世界に誇るオペラ歌手（バス）で、日本ラトビア音楽協会副会長の岡村喬生氏が77歳誕生日当日の10月25日、浜離宮朝日ホールで喜寿記念リサイタルを行い、年齢を全く感じさせない圧倒的なボリュームのフォルテッシモと繊細なピアノッシモを交えながら信じられない長いブレスで満員の聴衆を感動の嵐に包み込んだ。日本人が持つ身体や言葉の壁などの様々なハンデを血の出るような努力で克服しながら、ヨーロッパの有名歌劇場に君臨した栄光と数奇な運命は、まさにドラマそのもの。節目になった数々の場面を回想しながらイタリア・ドイツの歌を2時間半歌い続けた。

冒頭の「オンブラマイフー」は初の凱旋公演の最初に歌った作品。東京文化会館大ホールにやっと1000人の聴衆を集めたが、殆どがばらまいた招待券の客だったという。

この日の圧巻は二つのアリア。ケルン歌劇場初日に絶賛された「ドンカルロ・フィリッポ二世のアリア」と、ミュンヘン国立歌劇場で成功した「ボリスゴドノフ・ボリスの死」で文字通り世界を制した歌唱力、演技力はまさに世界のオカムラ、その変わらない声量には改めて度肝を抜かされた。ボリスは主役予定者の急病のため準備3日で出演した裏話も披露した。

他に「カタリ」などイタリアの歌4曲、「魔王」などドイツの歌4曲、ハイドンのオラトリオ「ネルソンメッサ」のバスアリア「クヴィットリス」など多彩なプログラム。この作品のイスラエル公演中、テルアビエの海で遊泳中に名指揮者ケルデスが溺死したエピソードは聴衆をビックリさせた。

アンコールもたっぷりサービスした後（3曲）、笑顔で「3年後の傘寿の時もよろしく」。益々の活躍を願

う聴衆の熱く暖かい拍手がいつまでも続いた。最近とみに老化を実感している二年後輩の私はすごく勇気を与えられた。

全体を通して、息の合った伊藤康英のピアノが秀逸で、この日のリサイタルを一層引き締めた。【徳】

矢田ちひろ・ピアノリサイタル
ブラームス作品の真髓を弾く

ウィーンを中心にヨーロッパで活躍する新進ピアニスト（日本ラトビア音楽協会会員）。この日はフランク（前奏曲、コラールとフーガ）、ショパン（幻想ポロネーズ変イ長調）、ブラームス（4つのピアノ小品、ソナタ第一番八長調）を弾いたが、とりわけ後半のブラームスのソナタ一番は、重厚なタッチでブラームス作品の真髓を聴かせた。さらにアンコールでリストの「愛の夢」「ハンガリー狂詩曲6番」を鮮やかに弾くなど、卓越したテクニックを存分に披露した。

矢田ちひろは国立音楽大学ピアノ科、ウィーン市立音楽院を卒業。その間にエマニエル・クラゾフスキー、ニーナ・スヴェトラノヴァ、エレナ・リヒテル、アキールズ・デル＝ヴィーニョの各氏の国際マスタークラスに、ウィーン、テルアヴィヴ、ニューヨーク、モスクワなどで参加。ウィーン芸術週間コンサートに毎年出演するほか、海外の多くのオーケストラとベートーヴェンの協奏曲などを数多く共演しているが、オーケストラメンバーたちにも高く評価されている。

矢田一家は揃って日本ラトビア音楽協会会員。両親の矢田廣・寛子夫妻が、リサイタル大成功にホッとした表情を見せておられたのが印象的だった。【徳】

（10月11日 津田ホール）



矢田ちひろ(中央)と両親

ラトビアの男声
アカペラグループ

「COSMOS」来日公演

6人の若いラトビア人による男声アカペラグループ「COSMOS」が来日、11月7日に神戸新聞社松方ホール、同9日に宝塚ベガホールで演奏会を行い、美しいハーモニーと、綿密に

計算されたパフォーマンス構成のグレードの高さに、超満員の聴衆を驚愕・瞠目させた。この演奏会は東郷武在大阪名誉領事と関西日本ラトビア協会が推進したもので、会場には来日中のビルクス・リガ市長夫妻の他、ヴァイヴァルス駐日ラトビア大使、オレグス同大使館員も姿を見せた。

7日は神戸市混声合唱団、9日は関西学院グリークラブが賛助出演し、音楽を通じた日本とラトビアの友好を深めた。9日には歌手の小田陽子さんが有名な「マールが与えた人生」(100万本のバラ原曲)をラトビア語で歌い、併せて聴衆に歌唱指導して大合唱を実現した。

8日には名誉領事館(ダイワハウス工業本社ビル)で「COSMOS歓迎の夕べ」が開かれ、こちらも大きな盛り上がりを見せた。

「COSMOS」は全員リガ大聖堂少年合唱団出身で歌唱力は定評があり、その上、ラトビアのSMAPに例えられる美男子揃いの人気グループで、とりわけ若い女性聴衆のハートを完全に掴み、一気にファンが激増した。



※この項は関西日ラ協会の池田裕子さん(関西学院史編纂室)と、特別出演した日ラ音楽協会の小田陽子さん(歌手)から届いた感想を抄録した。その後、宝塚在住の富永真智子さんから9日の演奏会について次の寸評が届いた。

「COSMOSを聴いて」

プログラムを開くと、曲目の所は空白で「当日発表」と書かれています。ベガホールのステージに立ち、声出しして選曲されたと後で知りましたが、バルト3国も含めて北欧の合唱曲の特徴は、気候風土の影響を受け、自然の美しさ、壮かさ、神秘性を歌い上げるものが多い…と聞いています。それが頭の隅に有った為か、透明なサウンドが心地よい風のように私の頭の中を巡り続けました。心から何時までも聴いていたい…と思ったステージでした。【編集室】

NHK東京児童合唱団
第37回定期演奏会

「響けうたごえ、空より高く、

海より深く」

8月に、小学生としては初の海外演奏旅行(欧州・p6に詳報)を行ったNHK東京児童合唱団の'08定演は、今年も多彩なプログラムをスケールの大きい意欲的で感動的な演奏で聴衆を魅了した(11月1・2日/

東京オペラシティコンサートホール)。今年のメインタイトルは「響けうたごえ 空より高く 海より深く」。プログラムは全員による「同声二群合唱のための“鳥の歌メロデー”」(指揮/金田典子)、ユースの「マジック・ソング(マリー・シェーファー曲)(指揮/加藤洋朗)、ジュニアの「組曲/あらしのように」(曲/上田真樹・指揮/金田)と続き、最後は欧州で好評を博した全員による「うたの旅～日本・ヨーロッパの国々」(指揮/金田・加藤)で、間宮芳生「合唱のためのコンポ15番」をはじめ、ハンガリー民謡やコチャール・マイクロシェの作品を存分に歌った。アンコールに歌った信長貴富編曲「風よそよげ」を、客席にいたヴァイヴァルス大使が感動的な表情で聴いていた。こんな優れた児童合唱団の意欲的な活動は日本の大きな誇りだと痛感した。【晴】

※ジュニア：小2～4、シニア：小5～中2、ユース：中3～高2

早稲田大学グリークラブ創立100周年記念演奏会

11月22日 サントリーホール大ホール

『次の101年、始めています!』

昨年、創立100周年を迎えた早稲田大学ルリークラブが11月22日にサントリーホール大ホールで記念演奏会を行い、戦前卒業OBから現役まで約280名余がオンステージして底知れぬ早稲田グリーの層の厚さと伝統のパワーを存分に誇示した。オープニング曲をエストニアの作曲家、ヨナス・タムリオニス氏に委嘱(ホトギス)するなど、委嘱作品4曲を含む意欲的なプログラムで101年目のスタートを切った。圧巻は第2ステージの若手OBグループによる「縄文」。昭和58年にワセグリ現役が、小林研一郎氏の指揮で初演し、旋風を起こした難曲を、今回は作曲家・荻久保和明氏の指揮で熱演して盛んにブラボーコールを浴びた。古いOBも加わった第1ステージは当協会の松原千振常務理事がシベリウスやトルミスの作品を振り、最後の100周年記念ステージ(最上川舟歌など全9曲)では、加藤晴生専務理事ら多くのワセグリOB当協会会員も出演した。何とも熱い演奏会だった。【徳】



現役も加わった最終ステージ

トピックス

リガ大聖堂少年合唱団

4度目の来日公演

天に届くボーイソプラノの美しい響き…、合唱大国ラトビアが誇るリガ大聖堂少年合唱団が4度目の来日、全国ツアーを行います。

【スケジュール】

(日本ラトビア音楽協会後援)

- 11月30日 兵庫・稲美町
12月3日 福岡・北九州市
 ウエルとばた大ホール
12月6日 大阪・高槻市
12月7日 兵庫・西宮市
12月8日 東京・日経ホール
12月9日 福島・福島市音楽堂
12月10日 東京聖マリアカテドラル
 教会
12月13日 愛知・岡崎市

【プログラム】

バッハ・グノー、シューベルトの Ave Maria、ラトビア民謡、世界の伝統的クリスマスソング他

【お問い合わせ】

アルス東京 03-3580-0379

12月3日の北九州演奏会はラトビア支援の会 (093-322-1123)

12月8日の東京演奏会は日本経済新聞社文化事業部 03-5255-2852

※10日の演奏会はラトビア語教室受講者全員で鑑賞予定。

【プロフィール】

リガ大聖堂少年合唱団は、1950年、ラトビアの優れた音楽院「エミール・ダルツィンズ音楽学校」を前身に創設された。音楽監督ヤニス・エレンストライツのもと、国内はもとよりヨーロッパ各地で最も評価の高い少年合唱団の一つとして知られ、国際的に極めて高い評価を受けてきた。ラトビアが国家独立に際し、800年の歴史を持つリガ大聖堂の古い伝統を受け継ぐため、この合唱団にその名を与えられ、1994年以来

「リガ大聖堂少年音楽学校」の合唱団としてこの大聖堂を本拠地とし、さらに活躍してきた。

教会音楽はもとより、幅広い合唱作品をレパートリーとし、国内の重要なコンサートへの出演の他、多くの海外公演を続けている。1995年、1999年、2004年に来日し絶賛を博し、今年が4度目の来日。1990年からリガで国際少年合唱フェスティバルが行われ、大事なホスト側のメンバーとしてこのフェスティバルを支えている。これまでCD14枚をリリース。

【CD情報＝当協会が発売】

キングレコードが来日記念盤「ノエル～ラトヴィアからの贈りもの」を11月5日発売。「きよしこの夜」から「フォーレ・小ミサ曲」まで全17曲。想像を絶するハイレベルの感動的名演。当協会でお買い上げいただくと純益金を協会基金として寄付されますのでよろしくご協力ください。

《お申し込み》

Fax 04-7132-5423

メール katohr@earth.ocn.ne.jp

◎価格2800円(税・送料含む)

《収録曲》

きよしこの夜／ひいらぎ飾ろう／陽気なサンタクロース／天使のパン／あぁ、ベツレヘムよ／天なる神には／クリスマスの夜に／いざ歌え、いざ祝え／クリスマスおめでとう／神のみ子は今宵しも／まぶねのなかで／グリーンスリーブス／まきびとひつじを／モテット「精霊よ、来たり給え」 W.A.モーツァルト／オッフエルトリウム「女よりうまれしものうち」 W.A.モーツァルト／詩篇第43「神よ、われを審き」 F.メンデルスゾーン／「小ミサ曲」 G.フォーレ

第2回ラトビア大使館サロンコンサート

佐藤満喜子さんが大使館にピアノを寄贈されたことが契機になって行われた第1回大使館サロンコンサート(7月29日)は、演奏はもちろん、大使館・協会から料理やドリンクが提供された懇親会もあって好評でしたが、12月2日(火)午後6時半(開場6時)から2回目の大使館サロンコンサートが開かれました。今回の出演者は高広幸子(フルート)、河西麻紀(サクソホン)、宇田川優美(ピアノ)、風呂本佳苗(ピアノ)の方々。この日も心豊かな懇親会が行われました。次回もお楽しみに。

琥珀

創立5周年記念事業への取り組み

日本ラトビア音楽協会は来年(2009年)創立5周年という大きな節目を迎える▼昨年来、加藤専務理事と、音楽協会にふさわしい演奏会開催を中心にあれこれ記念事業の検討を重ねてきた。理事会でも報告されたが、ガルータ作曲の「神よ、あなたの大地は燃えている(約50分の曲、テノール、バスのソロと混声合唱、パイプオルガン伴奏)」と、バスクス作曲の合唱曲「ドナ・ノービス・パーチェム(約20分の曲・オルガン伴奏)」の演奏を中心にした大規模な演奏会開催を第一案として考えてきた▼とりわけ前者は、1939年に始まるソ連の支配に苦しむラトビア人の苦悩と神への祈りを表現したもので、我々の協会がラトビアとの友好を深める意味で、ラトビア人が苦しんだ時代の気持ちを分かち合うというコンセプトが前提にあった。出来れば、指揮者、ソリスト、パイプオルガン奏者とコーラスの一部をラトビアから招きたい、という大きな目標を掲げた。加藤専務理事はこのプロジェクトにラトビア人にも参加してもらうことで、経費の一部をラトビア側にも負担してもらう交渉も進めていた▼ところが昨今の金融不安で、ラトビア側の負担期待が極めて不透明になった。協会としても、資金集めに決め手なく、会場、日本側コーラス、聴衆動員など、課題が多く、大規模演奏会の実施はきわめて厳しくなった。会長、副会長から「5周年の大事業は、2年かけても良いのではないか」という意見も出て、このプロジェクトは時間をかけて実現を目指そうと修正することになった。もちろん5周年記念行事は、この大プロジェクトに関係なく、会員・関係者が揃って祝える行事を行うことにしよう…。目標の一つだった合唱曲集の発行は、先日松原常務理事が現地側の案を持ち帰り、間もなく具体的な検討に入る▼加藤専務理事の構想は、「09年夏に日本サイドの合唱出演希望者を1週間ほどラトビアに送り込み、現地の合唱団と共に演奏して、まずラトビアで話題を喚起する。そして翌年(10年)、現地の合唱団30~50人を日本に呼び、日本の合唱団と共演を実現して記念コンサートを盛り上げたい。ソリストは日本の歌手を起用し、指

揮者とオルガニストを招く」ということだった。だが、現実には極めて厳しくなった▼当面の5周年記念事業は、全会員が揃って祝福できる、そして、全員で次への飛躍を共感し合えるものを具体化した。5周年の最大の目標・課題は、300人規模の協会に成長させることではなからうか。

協会合唱団の創設について

今年「歌と踊りの祭典」を視察したメンバーにとって重要なシーンがあった。全員があらかじめ準備して、レセプションでラトビアと日本の歌を歌って喜ばれ、音楽による交流の素晴らしさを実感した。現地のメディアには日本ラトビア音楽協会の合唱団と紹介された▼かねてから私は、レパートリーにラトビアと日本の代表的な曲を持つ協会の「日ラ友好合唱団」創設を考えていた。歌えるメンバーが多いし、指揮者やラトビア語発音の指導者も事欠かない。将来的に演奏会を開催できれば最高だが、レセプションや、ラトビアから訪日した人々の歓迎会など歌う場面は度々ある。ラトビアの人たちの歌による交流は何よりも強い絆に結びつく。メンバー同士の一体感も深まる。活動を通じてラトビアという国の魅力を多くの人に知ってもらえる。当面は月2回程度の練習から始めればよい▼日頃は一緒に練習できない遠隔地の方々もメンバーにも入ってもらって、楽譜やテープで練習していただき、大きなイベントには参加してもらおう。上手でなくていい。正確なラトビア語で歌えるハートのある合唱団が出来ないだろうか…▼期せずして加藤専務理事も、来年度事業の大きな目標に「ラトビアの歌を歌う会」創設を考えていた。二人で食事する機会があった時、お互いに考えていたことが合致してワクワクした気持ちになった。「将来は多くの歌上手や指導者も加わってくれるレベルの高い合唱団を目指したい」という。「ガルータ作品の日本側を担えれば…」という思いも垣間見えた▼どんな合唱団にするかは、参加される方々の総意を尊重することになろう。いずれにしても多くのメンバーが集り、楽しく意欲的な練習ができれば、手作りによる5周年記念の目玉になるかも知れない。私自身も老骨に鞭打って、練習を欠かさずに出席して楽しく歌いたいと念じている。

(徳)



寄稿

ラトビアとの友情プロジェクト始まる

川島泰彦

(日本ボーイスカウト富士地区)

7月24日、ラトビア共和国から23歳の女性リーダー、リエーネ、17歳の男子スカウト、アーチス、女子スカウト、ポーリーナの3名が中部国際空港に降り立った。リエーネは5ヶ国語を操る才媛、アーチスはスカウト技術抜群、ポーリーナは昨年の世界ジャンボリー参加した。12名から選抜された優秀なスカウト達だ。3人とも礼儀正しく、常に笑顔で、しっかりした英語を話す立派な若者という第一印象は、3週間接してその通りだった。3人は富士市内10軒のスカウト家庭に1週間づつ分宿し、日本を知り、友情を育んだ。8月12日に帰国する時は、スカウト達もホストファミリーも涙を流して別れを惜しむほど友情は深まった。

滞在中、行事が多かったが、日本の厳しい暑さの夏に負けることなく、常に笑顔でスケジュールをこなしたのは見事だった。主な行事は歓迎会、スカウト交流キャンプ。共にテントで生活し、同世代で環境問題などを話し合い、キャンプファイヤーでは歌や踊りで交流を深めた。さらに一行は、斉藤斗志二代議員、富士市長表敬訪問、東京見学、在日ラトビア大使館訪問を行った。東京見学は渋谷の友好団の協力で実現し、スカウトの家庭に滞在して大都市を楽しんだ。大使館ではエギリス次席、



①富士のスカウト達に囲まれるアーチス ②ラトビア大使館を訪問し歓迎を受ける。来日後初めてラトビア語で会話 ③感動な富士登山、山頂でラトビア国旗を背に左からエイーナ、ポーリーナ、アーチス ④送別会でハッピーをプレゼントされ快心の笑顔

グナ書記官、オレグス館員の心暖まる歓迎を受け、しばしラトビア語での報告話の花が咲いた。次に訪問した日本ガールスカウト本部では、1960年代に日本とラトビアの間で友情の交流があった証拠の品を目にすることができ、一同大いに感激した。

富士登山、お茶会、工場や寺社見学など盛り沢山だった。特に山がない国から来た彼らは、富士山での貴重な体験とご来光の荘厳さに心を打たれ一番記憶に残っただろうし、サポートしてくれた人々との友情も生まれた。

送別会では両国の若者達が見事に打ち解けて、友情の花を咲かせている様は実に美しく見えた。来年は富士地区のスカウトがラトビアを訪問する計画で、さらに友情が深まることを期待したい。

【編集室註】日本とラトビアスカウトの交流は、少年時代からスカウトだった著者が米国シアトル滞在中の1968年、当時、同地に亡命中だったラトビアの傑出したBSリーダー、ベリザー・ラジン氏に出会ったことに始まる。同氏はBS運動の創始者バーデン・パウエル卿から、最高の栄誉で

あるシルバールーフ章を受賞していた。ラジン氏の死後、この勲章は著者・川島氏が保管する運命を辿る。それから35年経過した2007年、ラジン氏が愛してやまないラトビアへ返還され、これを契機に両国スカウトの友情の絆が固く結ばれた。

(紙面の都合でラトビアからスカウトが来日した経緯は抄録にしましたが、川島氏がLatvija8号、及び同9号に詳しく寄稿されていますので再度ご覧ください。なお本14号発行後、協会HPに全文とカラー写真数枚を掲載します。)

情報断片

♪…建国90周年記念日に、大使が「ラトビアが独立国家として尊厳を取り戻した特別な日であり、全国民にとって神聖というべき意義を持つ日」と格調高く語られた挨拶に感動しました。大使の卓越した外交能力・リーダーシップと、館員全員の一致団結した活躍がなければ、大使館開設2年余でこんなに盛大なレセプションは行えなかったでしょう。終始、爽やかな笑顔で来客と歓談される姿に、建国以来の苦闘の歴史を知る私は、民族の誇り、愛国心、さらなる決意をしっかりと感じました。

♪…レセプションで、翁長良光(沖縄)、井下佳和(旭川)、東郷武(大阪)の各名誉領事と個々に懇談する機会がありました。それぞれ人間味溢れた個性豊かな方々ですが、共通して

いるのは、「ラトビアという国の魅力を多くの日本人に伝える為に全力で活動したい」という強い心でした。北海道では東川町ラトビア交流協会が、ラトビアが独立を回復した翌年(1992年)に誕生して活動を続けています。名誉領事館の開設で、活動はさらに加速することでしょう。大阪ではいち早く「関西日本ラトビア協会」が誕生しました。武道によるラトビアとの交流が続いている沖縄は、どこかラトビアと共通した価値観があるだけに、一層、親近感が増すことでしょう。「カラー写真をたくさん入れた機関紙を発行します(東郷氏)」という『関西・らとびニュース』の発行も頼もしい限りです。

♪…当協会のホームページをご覧ください。協会ニュース「Latvija」は経費的に年4~5回しか発行できませんし、カラー写真

を掲載できません。そこでHPをリニューアルし、当編集室がニュース・トピックス速報とカラー写真を次々に掲載して「Latvija」と連動しながら広報を強化することにしました(7面詳報)。皆様からもどんどん情報をお寄せください。近日中に、会員連絡ページも新設する予定で、開くためのパスワードなどもお知らせします。

♪…90年前の建国前後に一人のラトビア人が関西学院で教えていたこと、ラトビア人としての誇りを持った人だったこと、音楽を愛した人だったことに、私は大変関心を持って前号に関学・池田裕子さんの記事を掲載しましたが、今号でも大使の関学訪問の原稿を依頼しました。実は池田さんを、歌手の小田陽子会員から紹介されました。共に大使を尊敬しラトビアを愛する、稀に見る才媛

です。何とこの二人がCOSMOSの演奏会(コンサート短評参照)で、お互いにワクワクしながら初対面を果たしました。その時の感動をそれぞれからメールで聞かせていただきましたが、本当に素敵な出会いだったようです。ラトビア大使館は、日本人同士の出会い・友情も育んでくれているようです。小田さんにはパーティーでも何度か歌っていただきましたが、池田さんも関西日本ラトビア協会理事として活動されます。

♪…当協会設立発起人の一人でもあったニュースキャスターの筑紫哲也君が73歳で他界しました。早大グリークラブで私の4年後輩でした。その頃の話などをHPに掲載しましたのでご覧ください。記者時代は、私が毎日、彼が朝日という間柄ですが、本当に素晴らしい記者でした。心から冥福を祈ります。(徳)



私たちは人びとの健康を高め
心豊かな社会づくりに貢献します

 **大鵬薬品**

<http://www.taiho.co.jp/>